

## 令和5年度「地域包括ケア実習Ⅱ」報告会が四国新聞に掲載されました

本学大学院実践者養成コース公衆衛生看護学2年生の学生が、「地域包括ケア実習Ⅱ」として令和5年5月8日～6月2日までの4週間、小豆島町において健康危機管理（自然災害）に関する現地フィールド学習を行いました。今回の実習では、小豆島町神懸通地区の地区視診や住民へのインタビュー調査から地区診断を実施し、同地区の高齢化の現状や課題、過去の災害の歴史や地区の自主防災活動等について理解しました。また、今後の自主防災活動に向けた世代間交流のあり方への提案など、実習を通じた多くの学びを得ました。そこから、災害時の地域課題の解決に向けた対策について、小豆島町防災担当者や保健師、地区会長らとともに検討させていただくことができました。

今回、住民代表者からの要望もあり、神懸通地区住民を対象とした報告会を開催することができました。学生は集まった住民約60名に「多世代間の結びつきをより一層強め、地域全体で防災意識を高めていく必要がある」と呼びかけました。

今回の実習での経験を将来の保健師としての地域活動に生かし、住民と協働した地域課題の解決に向けた取り組みにつなげてもらいたいと思います。

（看護学科：辻よしみ、植村千明、横溝珠実）

### ☆6月28日(水曜日)の四国新聞に掲載されました

「世代を超えて助け合える準備を進めよう」と提案した学生たちの報告会。小豆島町神懸通、神聖道場

県立保健医療大学院生  
**普段の交流が災害時の力に**  
 小豆島町神懸通地区を対象に防災について現地調査を行ってきた県立保健医療大学の大学院生2人が26日、同地区の神聖道場で報告会を開いた。地域住民の前に2人は「高齢化率が町の中でも特に高い地域。世代を超えて助け合う取り組みが重要」と呼びかけた。

報告会は、同大が効率的な保健医療実現に向けて町と協力して開催。公衆衛生看護学の修士課程2年の神宮梓さん（22）と浜本亜季さん（24）が発表し、住民ら約60人が参加した。2人は、5月上旬から6月上旬までの計10回、神懸通地区などを訪れ、過去の災害時の被害や地域住民の現状などを聞き取った。報告会では、同地区の高齢化率が5月現在で53・6％と町の平均45・2％を大きく上回っていることを示した上で「避難時に支援が必要なが多い。普段から世代を超えた交流の場を設け、地域の実態を全員で把握しよう」と強調した。具体的には、1974、76年に同町を襲った台風による大規模な土砂災害を、多くの高齢者が体験談として語れることを挙げ、「子ども会や小学校などで防災について話すことで交流が進み、対策も整っていくのでは」と提案した。



住民への報告会の様子

出典：四国新聞(令和5年6月28日)

著作物使用許可許諾済